

第 21 回(2014.04.15 配信)

篠井純四郎の日本史講座—「間違えやすい日本の古い時代の話」

御三家と御三卿

「御三家」という言葉をよく耳にします。とかく日本人は「歌手の〇〇御三家」とか「ポルノ俳優の〇〇御三家」などと、この言葉を使いたがるのですが、そもそもは、徳川家康が徳川家の子孫が絶えないように尾張、紀伊、水戸に自分の子供を領主(大名)として配置しましたが、この三家を特に「御三家」と称したことからきています。同じ江戸時代において「御三卿」という言葉がありましたが、「御三家」に比べてあまり知られていません。知っていても混同している人も少なくないようです。「御三卿」とは、家康にならって 8 代将軍吉宗が家康にならって自分の三人の子供に別家をたてさせ、それぞれ田安家、一橋家、清水家と称し、以降、この三家から将軍を出すことにしました。この三家は「御三家」のような大名ではなく、あくまでも分家扱いでした。

徳川家康は 9 男義直(よしなお)に尾張 61 万 9 千 5 百石、10 男頼宣(よりのぶ)に紀伊 55 万 5 千石、11 男頼房(よりふさ)に水戸 28 万石が与えて大名とし、これが御三家と呼ばれるようになりました。家康の子供は、正式には 11 男 5 女がいたと言われていますが、家康が亡くなるまでに生存していたのは、3 男秀忠(2 代将軍)、6 男忠輝(ただてる)、9 男義直、10 男頼宣、11 男頼房の 5 人だけでした。このうち、6 男忠輝は越後高田の長沢松平家に養子に入ったのですが、行いが悪く改易(領地没収)させられました。

領地を与えたとき、幼い領主を補佐するため「附家老」と呼ばれる家老職を特に任命しました。尾張家には成瀬正成、竹越正信、紀伊家には安藤直次、水野重央、水戸には中山信吉が任命されました。なかには、すでに大名格の者もいましたが、大名と同じ扱いをするという条件で、それぞれ 3 万石前後の所領を与えられて仕えました。しかし、時が経つにつれてこの約束は守らなくなりましたので、明治維新の際に新政府に抗議して大名として認められ、侯爵とか伯爵などの爵位をもらい貴族の仲間入りができました。

8 代将軍徳川吉宗は、次男の宗武(田安德川家)、4 男宗尹(一橋徳川家)、吉宗の長男家重(9 代将軍)の次男重好(清水徳川家)を別家させました。この三家は、当主が公家の位で従三位(じゅさんみ)だったため、この官職は宮中の各省の長官(卿)に任じられる位でしたから「御三卿」と呼ばれました。

「御三卿」家の創設は、代が下るに従い、将軍家と「御三家」の血縁が薄くなったから、「将軍により近い血筋から将軍候補者を立てる」ことを目的としたものです。最後の将軍第 15 代徳川慶喜は一橋家の当主でした。しかし、慶喜は水戸家の生まれで一橋家に養子に入って、後に徳川宗家を継いで将軍となったのです。血筋は水戸家ではありますが吉宗の血筋ではありません。代が下るに従い、徳川御三家の当主の中には知的障害者も出てきたり、男子が病弱で藩主の人が務まらなかつたりで、他藩の子供を養子にしたりすることが多くなってきたため、家康の血が入っていたかどうか、いずれにしても血は薄くなっていたことは間違いありません。徳川の血が薄くなっていくと、吉宗が心配したのもあながち間違いではなかったのかもしれない。

しかし、吉宗の将軍就任時、尾張家に将軍職を渡さないための策略だったという説があります。正徳 6 年(1716)、7 代将軍家継が亡くなったとき、尾張の徳川継友との後継者争いで吉宗が継友を毒殺したという噂が流れ、尾張家との関係が悪くなったことが理由だといわれています。落語

や講談では、御三家筆頭の尾張徳川継友に將軍職にとの話があったとき、継友はすぐに承諾してはあまりにも現金だと思われるので一旦は辞退する振りをした。ところが、次に控えていた吉宗が「それならば」と引き受けてしまった。継友は、自分が辞退すれば当然吉宗も辞退して、結局は自分が將軍職を継げるものと信じていたのですが、これで將軍職を逃したという笑い話です。遠慮も時と場所と相手によるという教訓ですね。

旗本と御家人

時代小説などで「旗本(はたもと)」とか「御家人(ごけにん)」という言葉が出てきます。御家人とは平安時代から貴族や武家の棟梁に仕えた家人(けにん:家来)を指す言葉だったので、どうも誤解して脳細胞が混乱するようです。

旗本とは、武将の直属の家臣(直参:じきさん)呼ばれた武士ですが、江戸時代には一般的に100石以上1万石未満の武士で、儀式の際には將軍に拝謁できた者(御目見得:おめみえ)を旗本と呼びました。御目見得できない下級武士のことを御家人と呼びました。とはいえ、極めて少ない例ではありますが例外はありました。

「旗本八万騎」という言葉がありましたが、実際に旗本は8万人いたわけではありません。「大江戸八百八町」とか「嘘八百」といったように、たくさんという意味に受け取るべきでしょう。江戸時代の旗本はおよそ5000人で、御家人をあわせても2万人くらいでした。もっとも、その家来や使用人などを含めれば8万人くらいにはなるかもしれません。また、旗本でも禄高(給料)が3000石以上の者を大身旗本と呼びましたが、大身旗本と呼ばれた者はおよそ100人くらいで、実に9割が500石以下でした。御家人は、戦場においては徒士(かち:歩行で戦う下級の武士)で、馬に乗って戦う侍が士官とすれば下士官、兵に当たります。平時においても、馬や駕籠にも乗ることが許されませんでした。

旗本の役職は、江戸城留守居役や側用人、御側御用取次、あるいは奉行職などおよそ200ちかくあり、役職につくと役料という手当が付きまして。また御家人の職は250くらいありましたが、人数が限られていましたから、およそ半数に当たる1万人は職がありませんでした。家禄の少ない旗本や御家人は、役職につけなければ生活が苦しく、内職をしなければ到底やっていけなかったようです。武士の内職は禁じられていましたが、幕府も黙認していたようです。江戸後期になると、御家人の身分を「御家人株」といって売買するようになりました。

無役の者のうち、3000石以上の者を「寄合席(よりあいぜき)」、それ以下の者を「小普請組(こぶしんぐみ)」に入れられ、頭(かしら:責任者)の管理下に置かれました。寄合席の旗本は高給取りですから遊んで暮らしていましたが、小普請組のなかではほとんどが給料が少ないので、役職に就こうとして就職活動をしていたようです。平時では何もなかったから、幕府はおおよそ1万人の無職者に給料を払っていたわけですから。したがって、無駄飯を食べていた者も多く、次第に財政が逼迫していったのは当然のことでした。江戸幕府の体制が二百数十年以上続いたのは奇跡だったのです。

現在の会社組織でしたら直ちに倒産することでしょう。その結果、失業者が増えて失業保険や生活保護費の支給額も増えて、国の財政がひっ迫して税金を上げざるを得なくなり、ますます国民の生活が苦しくなることでしょう。莫大な国債という借金を抱えた日本の現状とどこか似ているのです。

(篠井純四郎)